

Missionary—シニア伝道の魅力

コロナ禍でも貫いた夫婦伝道の喜び

—日本福岡伝道部 かとうしんいち 加藤真一長老・まりこ 眞理子姉妹—



今日、日本で働く宣教師は、新型コロナウイルスによる日本政府の入国規制のため激減している。広島から全九州、沖縄・石垣島に至る広大な福岡伝道部にはかつて、常時150人ほどの専任宣教師がいたが、今は37人。シニア宣教師は加藤真一・眞理子ご夫妻のただ一組である。

広い伝道部をカバーするために、若い宣教師一組が平均して3～4ユニットを受け持つ。下関の一組の若い宣教師は、福岡ステークで2つ、山口地方部で4つ、計6つのユニットを受け持っている。非常事態と言ってもいい。基本的にはZoom※1で遠隔レッスンをしているが、面接やバプテスマなどの大切な場面では出張となる。このような状況下において、シニア宣教師の活躍の場は広がり、彼らの果たす役割は以前にもまして重要になっている。加藤ご夫妻が奉仕する山口地方部宇部支部では、彼らが唯一の宣教師だ。

加藤ご夫妻は新潟の教会の開拓者である。若い頃から地域の教会を担ってきたシニア世代は人生経験が豊富だ。どんな

問題にも対処できる、物事に動じない、人との良い関係を作れる……その光は周りを照らす。「夫婦宣教師がいてくれるだけでありがたい。」地元の会員たちはそう感じている。

加藤ご夫妻は当初、札幌神殿の神殿宣教師として召されるも、新型コロナウイルス感染症拡大のため自宅待機となる。落ち着いた日々を過ごすうちに福岡伝道部での奉仕が決まり、2020年12月16日、宇部支部に着任した。案内されたアパートは照明も何もなく、夜は真っ暗で、まるでキャンプをしているようだった。宇部支部の会員たちが駆け回り、すぐに生活に必要なものを整えてくれた。こうして宇部での伝道が始まった。

聖なる山で導きを求めて

「あの山に登れば必ず導きが得られる。」2021年2月、冬日和の穏やかな日、加藤眞理子姉妹は強い思いを抱いて真一長老とともに山の頂きを目指した。宇部支部の会員たちが「聖なる山」と呼んでいる標高250mの霜降岳しもふりだけだ。山頂で、眞理子

姉妹は一人離れてひざまずき祈り始めた。真冬の風の冷たさも気にならなかった。

「神様、どのように伝道すればいいでしょうか……。」気がかりの一つはSNS※2—facebookを使うことだ。召されてすぐ、宣教師訓練センターでのZoom訓練の際に奨励されていた。しかし、何を投稿し、発信したら伝道に役立つのか。

すると、すぐにある言葉が胸に湧いてきた。「絵手紙」だった。伝道に出る前に2年ほど、絵手紙の教室に通っていた。宇部に着任してすぐ、多くの人と接したいと考えて絵手紙を描いた。誕生日の人、教会から足が遠のいている会員、気にかかる人、お世話になった人などに届けた。絵手紙は伝道の備えだったのだ。祈りの答えに感謝の念が湧き、勇気が出てきた。facebook活用の方向性が決まった。素朴で温かみのある絵手紙を描いて行こう。そう確信が持てた。

絵手紙教室

その日、帰るとすぐ「絵手紙を教えて」と一人の会員から連絡が来た。アパートか

※1—インターネットを介したテレビ会議システム

※2—ソーシャルネットワークサービスの略。インターネットを使って個人が情報発信し、人と人の繋がりをつくるサービス。facebookやInstagram、LINE、twitter、YouTubeなど

Missionary —シニア伝道の魅力

ら2kmほどの景勝地、ときわ公園で描いていると、年配の女性が近づいてきて興味を示した。こうして週に一度、10名前後での絵手紙教室が始まる。教会員も任意で参加した。近くの人は教会堂へ集い、山口支部などの離れた人のためには加藤長老がZoomを使って同時配信する。

「絵手紙は下手でいい、下手がいいのです。筆の上の方を持ってゆっくりと動かして描いていきます。思うようにコントロールできないから、味わいのある絵になるのです……」机の中央にはトマトやナスの野菜、花など、持ち寄った題材があり、その横には硯、筆、日本画用の顔彩が置かれる。じっと見た後、息を止めて線を描く。それが絵になるとホッとした雰囲気包まれる。ワクワクしながら色をつける。「きれいに塗らなくてもいいですよ。塗り残しも味わいになります。」最後に、やはり筆の上の方を持って、ゆっくり動かして文字を入れる。文字を入れると、途端に絵手紙が生き生きとして、描いた人の気持ちが伝わってくる。絵手紙の指導は障がい者施設の人たち、小学校の子供たちにも広がった。教室が軌道に乗るとSNSにも投稿を始めた。「誰にでも出来ます。描いていると心が解き放たれてきます。そして思いが伝わる。そこが魅力です。」楽しそうに語る眞理子姉妹は、しかしこう続ける。——「絵手紙を教えることはわたしが本当にやりたいことではないのです。」

創造性あふれる伝道

一方、加藤長老は赴任直後から、記念誌『宇部の聖徒たち』の編纂を始めた。「実は新潟を離れるときに、50年近くお世話になったお礼の気持ちを込めて、会員の話をもとめた『証集』を作りました。今年には宇部支部伝道開始50周年なので、以前



市立小学校で絵手紙を教える加藤眞理子姉妹



出来上がった作品を全員で鑑賞する



毛を刈られたばかりの羊



Zoomによる
絵手紙教室の様子



羊毛からごみを取り除く



あえて筆の端を持ってゆっくり描く



洗浄液で洗うと……



真っ白な羊毛になる

の経験をもとに『記念誌』を編纂するのがわたしの使命だと感じました。」

記念誌には、宇部支部ゆかりの人たちの証や年表、資料、写真などで50年間の経緯がとづられている。長い歴史の中で信仰を培ってきた大勢の会員たちの経験や証を記録に残すことは、後世への貴重な遺産になる。当初の予想を超える150ページの大作となり、書籍として本格的な体裁が整えられた。2021年11月に業者が装丁、印刷して一冊の本になった。

歴史が好きな加藤長老は、山口ゆかりの吉田松陰についても調べ、小冊子を作った。「松陰の言葉はイエス・キリストの教えと共通点が多くあります。」この冊子には吉田松陰の言葉と聖書からの抜粋が記されている。これを伝道のツールとして活用するほか、広報の一環として、松陰の記念事業を行う公益財団法人松風会や近隣のキリスト教会に配っている。

そうした働きの日々を振り返り、加藤長

老は語る。「わたしは何の制約もないこの伝道が性に合っています。自分で考え、計画し、実行することが楽しいんですよ。ゆっくりと流れる時間をロングバケーションと呼んで楽しんでいます。」

羊毛紡ぎと福音

ある日、加藤長老・眞理子姉妹は一通のメールを受け取る。「オーストラリアで伝道していた息子さんの助けにより改宗しました。お会いしたいです。」広島在住の松原正典兄弟^{※3}からだ。松原兄弟は山地で牧場を経営していて、家族で片道1時間半かけて三原支部に集っている。

4月末、その牧場へ出かけた。牧場には刈り取った羊毛が置いてあり、帰り間際に松原兄弟から『羊の毛、いります?』と声がかかった。扶助協会の活動に使えるかもしれないと軽い気持ちで一袋を手にした眞理子姉妹は、しかし、汚れて茶色になった羊毛を抱えてはたと困った。





「これを毛糸にするにはどうしたらいいんだろう？ どこかに教えてくれる人はいるかしら。」

宇部支部会長夫人の山野瑞紀姉妹が糸紡ぎをすることが分かり、早速、一緒に取り掛かった。洗浄液で洗い、ごみを取り除くと茶色の羊毛が真っ白になった。乾かした後、ブラシを大きくしたようなハンドカーダーでこすり合わせるとフワフワになる。いよいよ糸紡ぎだ。円錐状の重りのようなスピンドルに羊毛を巻き付ける。それを高く掲げるとクルクルと回って撚りがかかり、毛糸となる。同じ太さになるように反対の指で引き出されてくる羊毛を調整する。毛糸玉が大きくなると加藤長老の出番だ。手に持ってクルクル回す。カセにした毛糸をぬるま湯に浸して撚り止めをする。こうして、毛糸玉5個が出来た。「この毛糸で孫の帽子を編みたいと思っています。」両手にフワフワの毛糸玉を抱えて眞理子姉妹は笑う。

「羊毛が毛糸になる過程はまさに奇跡です。糸を紡ぐときダマになったり切れたりしても、ブラシをかけて元の糸に戻すことができます。それは、人生は何回でもやり直せることに気づかせてくれます。スピンドルをクルクル回しながら羊毛を巻き取るとき、糸は驚くほど丈夫になります。それは、試練によってわたしたちが強められるのに似ています。キリストの贖いにより、わたしたちの人生もこのように美しく、また重荷がとれて軽くなるのだと実感できました。」——羊毛紡ぎの活動は眞理子姉妹に、福音の神髄を思い起こさせた。

人に仕える

「毛糸玉や絵手紙の活動はいわゆるスポット、伝道のアクセントです。わたしたちが常に力を注いでいるのは会員や求道者のサポート、そして宇部支部の歴史の編纂です」と加藤長老姉妹は口を揃える。2021年10月号ローカルページで紹介

した斉藤和希姉妹の改宗^{※4}を加藤ご夫妻はサポートした。宣教師のレッスンの間、4歳になる娘の実和ちゃんの子守をしていた。自分たちのアパートに招いて家庭の夕べもした。部屋に置いている加藤家の家族写真を見て、彼女は「家族ってこんな感じなんですね」とつぶやいた。

2021年4月18日、和希姉妹はバプテスマを受ける。

翌5月、和希姉妹の息子で生後半年の作和くんが手術のため入院し、和希姉妹が付き添うことになった。加藤ご夫妻は2週間の入院期間中、山口市へ出向き、家族の手が足りないときに、山口支部の姉妹たちと交代で実和ちゃんの子守や食事の支度をする。面倒を見ている間に実和ちゃんは加藤ご夫妻を「じいじ・ばあば」と呼ぶようになった。和希姉妹は加藤ご夫妻から家族の温かさを感じていた。その温かさまた、彼女の改宗を後押ししたのかもしれない。

加藤長老はしみじみと語る。「何の気負いもなく伝道に出ましたが、宣教師の経験を通してミニスターリングの何たるかを学びました。それまで、リーダーシップは引っ張っていく、鼓舞することだと考えていました。でも、それでは人は変わらないのです。仕えられることで、人は大切にされている、愛されているのを実感します。そのときに人は改心します。」

決意がすべての始まり

加藤ご夫妻は1973年に結婚し、5人の子供を育て上げた。その後、社会参加を志した眞理子姉妹は、60才で保育士の資格を得て働いていた。しかし将来を考え、子供たちへ負担を掛けないようにと、成人した子供全員が関東へ居を構えたのをきっかけに、埼玉県桶川市へ引っ越した。

※4—「永遠の宣教師」でありたい」2021年10月号ローカルページ L4参照

結婚した当時から、将来シニア宣教師として伝道に出ることを考えていた。什分の一を主に返し、伝道費用は老後資金の中から捻出することにした。旅行や娯楽にも節約の工夫をした。真理子姉妹はにこ

やかに話す。「子供がたくさんいて、いつも質素儉約の生活をしていました。楽しみといっても図書館で本を借りる、山歩きをする、などお金の掛からないものばかりでした。」伝道のことを具体的に考えたとき、心配なのは住む人のいない新潟の家だった。心置きなく伝道に集中するために解決しておくべきだと思った。「家を売却したら必ず伝道に出ます。わたしたちの伝道が主の御心に適うのなら買い手が見つかりますように。」訴えるような必死の祈りだった。

すると、間もなく売却が決まる。決め手は、買い主が内覧で見たリビングの「イエス・キリストの絵」と「家族写真」だったという。「このような人たちが住んでいた家なら幸せになれるに違いない」と。

「先に『決意』があったのです」と力強く話す真理子姉妹。伝道へ出る決心をすると、家の売却問題は速やかに解決した。常識とは順序が逆なのである。「資金を含め、準備が整ったら出ようと考えていたら、いつまでたっても出ることはできません。決心すると、あとは神様が道を開いてくださいます。そこを歩く意思があるかどうかです。その過程を神様は見ておられます。」加藤長老も微笑み、頷きながら続ける。「シニア宣教師の生活は楽しいです。長い人生の中で一年間、ゆったりした気持ちになって、人の役に立つことをする。やりたいことをして人から喜ばれる期間を持てるということです。」



実和ちゃんと加藤真理子姉妹 ときわ公園の牡丹苑で

がもたらされる機会です。そうは言っても、夫婦伝道には一定の資金が必要です。子育てを終えた後は、残された時間とお金を退蔵せずに有効に使いたいと思います。計算すると、12日間の海外旅行

費用と12か月間の伝道資金は大差がありません。どちらが本当の喜びと満足をもたらすかは言うまでもありません。」

「わたしが本当にしたいことは会員や求道者のサポートです」と真理子姉妹は言葉を継ぐ。「出来たきずなを保つ、育てるのがシニア宣教師の大きな役目の一つです。神様から与えられた絵手紙や羊毛紡ぎ、その他いろいろな活動は大きな助けとなりました。絵手紙からスタートしたfacebookは、慣れるに従って絵手紙だけでなく、伝道で関わった様々な活動を投稿して福音のメッセージを伝えられるようになりました。わたしはこれからも、このきずなを育てていこうと考えています。」

加藤長老は、伝道を考えている人たちに語りかける。「シニア伝道をもっと気軽に考えたら良いと思います。そこで得られる祝福を別の言葉で言うと、地上で最も善良な人たち(若い宣教師)に囲まれ、中央幹部から直接指導を受け、SNSテクノロジーを若くて優しい講師(宣教師)から忍耐強く教えてもらえ、多言語・多文化に接し、神の御業の最前線に身を置くことができるということです。何と魅力的な生活でしょうか。是非『伝道の木の実』を食べてみてください。誰でも何か良いものを持っています。その何かが大きき力となります。木の実の甘いのです。」自らを「ごく平均的な人」と称する加藤長老は笑顔で締めくくった。◆

シニア伝道を考えている人へ

福岡伝道部の原 伸二郎^{はらしんじろう}会長はシニア宣教師についてこう語る。「この世で起きるすべてのことには意味があります。わたしには、このコロナ禍で外国人宣教師が入国できない状況も、日本人の我々に、伝道活動にもっと積極的に参加するようにと促す主の思いがあるような気がしてなりません。若い宣教師の数が激減している今だからこそ、夫婦宣教師として奉仕する方々が増えることには大きな意味があります。シニア宣教師の活躍できる場は、むしろコロナ禍に大きく拡がり、それはコロナ後も拡大していくことでしょう。豊かな人生経験から培われた彼らの霊性には、人の心を変える力があります。また、若い宣教師とは違って活動の自由度も高いので、プログラムを企画し、行い、それを通して知り合った人々に福音を分かち合うことも出来ます。犠牲があっても、召された地で働くときに、それを上回る大きな喜びが得られます。伝道を考えている方々は是非、まず一歩踏み出す『決心』をして頂ければと思います。そうすれば、伝道に出るに際しての多くの問題が不思議な方法で解決されていくことでしょう。」

間もなく加藤長老・真理子姉妹の伝道が終わる。加藤長老は言う。「伝道は、他の社会参加では得られない喜びや満足



「結び固めをお願いします！」

——救いを求める妹が訪れた夜—— きくながなつこ 菊永奈津子姉妹 鹿兒島地方部鹿兒島支部

1955年、奈津子姉妹7歳当時の那覇市の繁華街風景 (沖縄県公文書館所蔵)

太 平洋戦争終結から3年足らずの1948年3月、菊永奈津子姉妹は沖縄県那覇市に生まれた。当時の沖縄はアメリカ合衆国の統治下にあった。「島じゅうどこでもアメリカ軍とその兵器がありました」と奈津子姉妹は回想する。舗装されていない道路を大型軍用車が行き交い、兵士は子供たちの呼びかけに応じてチョコレートやガムを撒いていた。

両親は病気がちで満身に働けず、幼い奈津子さんはいつもお腹を空かせていた。「何か口に入れることができるのが4、5日に1回というような生活で、生きるためにゴミ箱を漁ったり、排水溝に落ちている残飯を口に入れたりもしました。」戦後間もない沖縄は貧富の差が激しく、奈津子さんの家族以外にも多くの人々が飢え、亡くなっていた。奈津子さんには二人の妹がいたが、栄養失調のため一人は幼いうちに、もう一人は生後間もなく亡くなったと聞かされていた。

おにぎりと聖書

奈津子さんが8歳の頃だった。庭先で空腹に耐えていた彼女に隣家のお姉さん

が手招きをする。「おにぎりをもらえるのかと思って行ったら、聖書もらったんです。これを読めば幸せになれるよって。」奈津子さんはがっかりしながらも聖書を受け取った。家に帰ってめくってみたものの、8歳の子供には難しかった。

しかし、ある一文が奈津子さんの目に飛び込んでくる。「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。」※1その言葉は彼女の心に強い印象を残した。

「神様はこんなわたしのことも覚えていてくださるのかと思って、それから教会探しを始めました。」

神様について教えてくれる場所を求めて、十字架を目印に、目についた教会を片っ端から訪ねた。しかし、納得のいく教会にはなかなか巡り合えない。

「当時のわたしはボロボロの服を着た女の子でした。礼拝堂に入っただけで座ると、牧師さんがあっちへ座りなさいって言うんです。指示された場所には、わたしみたいにボロボロの服を着た人たちが固まっていて、元のいすには綺麗な格好をした人たちが案内される。こんなの本当の教会じゃない！ って飛び出して……そんな繰り返しでした。」

奈津子さんは苦勞して中学校を出た後、大阪で就職した。しばらくして沖縄に戻って結婚し、3人の娘を育てるようになっても「本当の教会」を探す旅は終わらなかった。訪れた教会は20ほどにもなった。

2人組の外国人

1984年、奈津子さんが36歳のときである。那覇市の繁華街である国際通りを歩いていた奈津子さんは、信号待ちをしている2人組の若い外国人男性に目を留める。「沖縄にいる外国人って大体みんなゆるい恰好をしているんです。でも彼らは違った。きちんとスーツを着ていて、声をかけたら元気をもらえそうだと思います。」

よく晴れた暑い日だった。奈津子さんは二人に話しかける。「あなたたちは何を売っているんですか、って尋ねました。そしたら英会話を教えていますって言ったので、教えてもらうことにしたんです。」

早速、最寄りの建物に連れて行ってもらった。裏口から入り、英語を教えられた

ものの興味は持てなかった。礼を言って帰ろうとすると、出口として表玄関に案内される。その壁には一枚の絵が飾られていた。「それはイエス様が使徒たちを聖任されている絵でした。そのとき、そこが何の建物なのか分かりました。」2人組の外国人は、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師で、奈津子さんが連れてこられたのは那覇ワードの建物だった。「英語はわからないから聖書を教えてください！ってお願いしてレッスンが始まりました。」

長老たちが最初に教えてくれたのは、預言者ジョセフ・スミスが聖なる森で天の御父と御子にまみえた「最初の示現」だった。しかし、当時の奈津子さんにはぴんと来ない。「14歳の男の子が突然、神様とイエス様に会ったなんて信じられなくて、こども本当の教会じゃないんだ、とがっかりしました。」

それでも奈津子さんはレッスンを受け続け、日曜日には聖餐会に集った。証を聞いていると胸が締め付けられるような気持ちを感じた。「うれしいような切ないような気持ちで涙がぼろぼろ出てくるんです。姉妹宣教師たちが、それは聖霊の働きですよ、って教えてくれました。」

自身の心が福音を求めていることを感じた奈津子さんは、その後1年間教会に通い続け、1985年11月3日、二女と三女とともにバプテスマを受けた。回復の預言者ジョセフ・スミスの証は得られないままだったが、福音は彼女の生活に新たな光をもたらしてくれた。

「お姉さん、お願いがあります」

1990年のある日、昼間の暑さの残る晩だった。当時、奈津子姉妹は引越し先の嘉手納支部でセミナー教師を務めていた。レッスンの準備を終えて夜10時ご



改宗後、一時期沖縄を離れて大阪で暮らしていたころ
大阪北ステーク茨木ワードに集っていた



自宅での奈津子姉妹。
沖縄で生まれ育ったが現在は鹿児島在住



姉妹宣教師たちと川遊び。2008年



菊永家近くの道路から望む桜島
季節によっては火山灰が降ってくる

ろ床につく。明日の早朝セミナーに備えて早く寝なければならぬのに、その日に限って寝付けなかった。

横になっていると、誰もいないはずの寝室に人の気配を感じた。「枕元に誰かが座っているんです。暗かったから表情は分かりませんでしたが、大人の女性の輪郭がぼんやりと見えました。」

突然のことに気が動転した奈津子姉妹は大声を上げて夫を呼んだ。隣の縁側にいた夫はすぐにやってきたが、枕もとを見て首をかしげる。「俺には何も見えないよ、って言って夫は戻っていきました。わたしには座っている人の影が確かに見えるのに。」

枕元の人影は真剣な声で奈津子姉妹に語りかけた。

「お姉さん、わたし雪枝よ。怖がらないで。」——そう呼びかけられて奈津子姉妹ははっとする。

「そのとき分かったんです。彼女は赤ちゃんのときに亡くなったわたしの妹だって。」雪枝、という名前に聞き覚えがあった。栄養失調で小さく生まれ、生後まもなく亡くなった下の妹の名だった。「わたしは当時、5歳くらいでした。だから雪枝のことは覚えていないけど、姉からは聞かされていました。また、両親は時々『雪枝、

雪枝』と涙声で話していました。」

枕元に座るのが亡くなった妹だと分かって、なぜ今になって自分のところに現れるの分からない。奈津子姉妹は混乱し続けた。「やっぱり怖くて、気が動転していました。明日のセミナーのために寝なくちゃと思ったりして。あわてて頭まで上掛けをかぶりました。」

すると、雪枝さんが何かを話したい様子で上掛けを下に引き下げる。反射的に奈津子姉妹は上掛けを引っ張り上げた。また雪枝さんが引き下げる。姉妹で上掛けをめぐる攻防をしばらく繰り返した後、雪枝さんがまた口を開いた。

「お姉さん、お願いがあります。」

この世を離れた妹が活着ている自分をお願いとはどういうことだろう。上掛けの下で耳をそばだてる奈津子姉妹に意外な言葉が飛び込んできた。

「今すぐにはできないと思いますが、東京神殿に行って親子の結び固めの儀式をお願いします。わたしだけ漏れています。」

あっ、と奈津子姉妹は思った。当時、自身の戸籍を取り寄せて先祖の儀式を行っていたが、生後間もなく亡くなった雪枝さんは役所に届出がされず、戸籍に記載されていなかったのである。

上掛けを引き下げて「お願いします」

Temple—神殿と家族の救い



日ごろから上り下りして足腰を鍛えている谷山寺の階段。137段ある



奈津子姉妹が描いたイエス・キリストの油絵とともに



伴侶の菊永節男兄弟と谷山支部にて



得意の沖縄料理「ウォーターアングリー」



鹿児島市内のご自宅の前で

妹がくれた証とともに

当時は怖くて妹と向き合うことができなかった奈津子姉妹だが、今は自分が霊界で雪枝さんと再会する日を楽しみにしている。

「あのとき現れた雪枝は亡くなった赤ちゃんのままでなく、大人の女性になっていました。教会員になった雪枝にまた『お姉さん』と呼びかけてもらえる日のことを想像すると大きな喜びがあります。」

多くの先祖が霊界で救いを待っている中、なぜ雪枝さんだけが自分の元に現れたのか、今も奈津子姉妹には分からない。しかし雪枝さんとの体験は、奈津子姉妹に信仰生活を続けるためのかけがえのない証を与えてくれた。

「雪枝が来てくれたおかげで、わたしは預言者ジョセフ・スミスへの証を得ることができたのよ」と奈津子姉妹は目を細める。「ジョセフ・スミスの経験を何度読んでも半信半疑だった。でも雪枝に会ったときのわたしと、モロナイに会ったときのジョセフの経験したことが全く同じだったんです。」——夜通しモロナイと会見し、一晩中起きていた預言者ジョセフ・スミス。その出来事は、モロナイが去った後すぐに鶏が鳴いたところまで奈津子姉妹の体験とよく似ていた。

「ジョセフ・スミスが与えられたのは教会を導くための啓示で、わたしのは家族に関する個人的な啓示。その違いは分かるけど、同じような体験を通して、確かにジョセフ・スミスは神から導かれた預言者だと分かりました。」

霊界から救いの儀式を求めてきた妹が残してくれた証。奈津子姉妹はその証を胸に、命ある限りこの福音を宣べ伝えていこうという決意を固めている。◆

と繰り返す雪枝さんに奈津子姉妹は「分かった、分かったよ」と応じる。そのとき、隣家で飼われていた鶏にわとりが鳴いた。外に目をやるとすっかり明るくなっている。

「セミナーに行かなくちゃ、と飛び起きて車に乗りました。もしかしたらまだ雪枝は部屋にいたのかもしれないけど、朝の光が差し込む部屋の中には何も見えませんでした。」

奈津子姉妹はその朝、いつものように教会でセミナーを教えた。雪枝さんとのやりとりについては、しばらく覚えていたものの、いつしか忙しい日常に紛れて忘れてしまった。

家族歴史センターでの不思議

それから3か月後、ステーキの東京神殿団体参入が行われ、奈津子姉妹も参加した。道中思い出して、友人の津嘉山春枝姉妹に雪枝さんとの邂逅について打ち明けた。

予定よりも早く到着した奈津子姉妹は津嘉山姉妹とともに、東京神殿から歩いて数分の家族歴史センターへ立ち寄った。自動ドアが開いた途端、女性の職員が「新垣姉妹!」と奈津子姉妹の旧姓で呼びかけてきた。「えっ、て思いました。でもバプテスマを受けたときは新垣だったの

で、当時の知り合いなのかと思って返事をしたんです。」

するとその見知らぬ姉妹ははっきりと言った。「雪枝さんの結び固めが漏れていますので、今日受けてくださいね。」

一度も会ったことのない彼女がなぜ、戸籍にも載っていない雪枝さんのことを知っているのか。驚いた奈津子姉妹は反射的に「はい」と答えて家族歴史センターを後にした。

「あまりにびっくりして、その方の顔を見る勇氣もいままドアを出て津嘉山姉妹と顔を見合わせました。やっぱりあの出来事は本当だったんだって。」

家族歴史センターでの不思議な経験は、奈津子姉妹の胸に雪枝さんとの約束を深く刻み込んだ。沖縄へ戻り、再び自身の系図と向き合った。「神様はわたしたちが知らない間にいろんな人を使って導いてくださるという事がよく分かります。あの職員の姉妹も多分わたしのことを知らないし、自分が何を言ったのかも分からなかったんじゃないかな。」

こうして1995年11月18日、東京神殿にて、雪枝さんが待ち望んでいた親子の結び固めが執り行われた。

インターネットでローカルページを
お読みいただけます

jp.churchofjesuschrist.org

●日本公式ウェブサイト>会員サポート
>福音ライブラリー>教会機関誌
>ローカルページ

今月のNews Headlines

●ニュースルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- 東京パラリンピックに出場する末日聖徒の選手たち 8月19日リリース
- 東京オリンピック2020—舞台裏で大会サポートを行った教会員 8月21日リリース
- 新たに召された日本福岡神殿会長会, メイトロン, メイトロン補佐の紹介 8月25日リリース
- パラリンピックに出場する末日聖徒の選手たち: 開会式では水泳選手が国旗を掲げる 8月25日リリース
- ユース・ミュージック2021 アルバム日本語版がYouTubeにて配信開始! 8月30日リリース
- パラリンピックでの末日聖徒の選手, 大会4日目と5日目: 陸上競技で金メダル, 車いすラグビーで銀メダル, 水泳では歴史を残す 9月2日リリース
- パラリンピックの末日聖徒たち, 第6~7日目: 競泳の金メダル 9月2日リリース
- 地域七十人解任の発表 (徳沢清児長老が解任) 9月6日リリース
- 博士であり兄弟そして友であるジョン・ギャスライトが名誉ある受賞に輝く 9月25日リリース
- YSA Connectに末日聖徒が集結 9月28日リリース
- 東京ステーキにて9年目の献血活動 地元コミュニティの方々も参加 10月10日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

役員の変動

2021年8月23日から2021年
10月21日までに管理本部会員
統計記録課に通知のあった
役員の変動(敬称略)

●日本桐生ステーキ

第一顧問: 軽部 憲彦
第二顧問: 高草木 文朗

●桐生ステーキ桐生ワード

ビショップ: 櫻井 清

●桐生ステーキ高崎ワード

ビショップ: 関 秀斗

●日本松戸ステーキ

会長: 小池 昭

第一顧問: 塩 昌彦

第二顧問: 西原 怜志

●松戸ステーキ牛久ワード

ビショップ: 志津野 誠

●金沢ステーキ金沢ワード

ビショップ: 小枝指 健

●名古屋東ステーキ中津川支部

会長: 水野 秀紀

●名古屋東ステーキ瀬戸ワード

ビショップ: 米田 良太

●岡山ステーキ米子ワード

ビショップ: 加持 晶広

●福岡ステーキ筑紫野ワード

ビショップ: 小西 周介

●日本熊本ステーキ

第二顧問: 須恵 耕二

●日本東京南ステーキ

祝福師: Brian E. Martini

●東京南ステーキ三沢軍人支部

ビショップ: Stephen D. Chatterton

専任宣教師のご紹介

新型コロナウイルスの世界的流行を受けて、専任宣教師のご紹介は教会公式ウェブサイトで行っています。紹介一覧は以下リンクからPDF形式でダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/3buW2J8>



なお、写真の掲載は自己申告制となります。掲載をご希望の方は、宣教師申請書の提出写真とは別途に、画像データまたは写真プリントを電子メールまたは郵送で、リアホナ編集室(メールアドレス/宛先は右に記載)へお送りください。その際、「お名前/ふりがな、召された伝道部名、出身ステーキ/地方部・ワード/支部名、オンライン訓練開始予定日」の情報を必ず添えてください。頂いたお写真をウェブサイトに掲載いたします。どうぞ、よろしくご理解、ご協力を賜りますよう、お願い致します。

リアホナ日本語版編集室

皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介ください

◎『リアホナ』日本語版編集室

〒106-0047 東京都港区南麻布5-8-8

TEL. 03-4545-3100(代)

電子メール:

JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、その他商品に関するお問い合わせ——

教会配送センター

TEL. 03-5668-3391

FAX. 03-5668-3392